

献 辞

高野清弘先生は、二〇一六年三月をもって、定年により甲南大学を退職されることになりました。先生は、一九四七年四月三〇日に京都府でお生まれになり、一九七一年三月に早稲田大学政治経済学部を卒業後、同年四月に東京教育大学大学院文学研究科修士課程に進学、一九七三年四月には博士課程に進まれ、一九七九年四月に大東文化大学の専任講師に就任され、同大助教授を経て、一九九一年四月に本学部教授に着任されました。以後二六年間にわたり、西洋政治思想史の教育・研究に研鑽をつまれ、二〇〇一年には甲南学園より永年勤続表彰（二〇年表彰）を受けられました。

高野先生は、本学においてはご専門の西洋政治思想史の講義・演習のほか、西洋政治史や政治学も担当され、法学部のみならず、全学的な教育の実践に貢献され、多くの有為な青年を社会に送り出してこられました。

先生は、一九九四年から二年間教務部長の職にあり、さらに二回にわたり（九八年～〇二年、一二年～一四年）学長補佐を務められるなど、大学運営に尽力され、務められた学内委員の数は五〇を超えておられます。法学部においても、二〇〇二年四月から一年間法学科主任として、経験と見識に裏付けられた力を発揮されました。

先生が教務部長のとき（一九九五年一月一七日）、この地方を大震災が襲いましたが、この日は後期試験の開始日に当たっていました。急遽、試験を中止し、レポートに代えることになりましたが、当時在学生は一万二千名超、仮に一人の学生が一〇科目のレポートを提出すると一二万通になります。先生は、それを集め各教員に割り振る仕事の指揮を執られました。教室棟がほとんど倒壊したなかであって、仮設校舎での講義運営に取り組まれ

る一方で、新校舎の建築委員会に加わり、甲南大学の再興に参画されました。

高野先生の研究は、単著として『トマス・ホッブズの政治思想』（一九九〇年、御茶の水書房。以下①）および『政治と宗教のはざままで ホッブズ、アーレント、丸山眞男、フッカー』（二〇〇九年、行路社。以下②）にまとめられています。書名から推察されるように、先生は、トマス・ホッブズの思想研究から研究生生活をはじめられ、リチャード・フッカー研究に歩を進められました。

先生のホッブズ研究を貫く視座は、ホッブズの論じる重要な観念（たとえば神の観念）は「和解しがたい相矛盾した要素から成立している」が、このような矛盾は「彼が継受しそして対決しようとしたヨーロッパの思想そのものが内包する矛盾」としてとらえられるのではないかとの問いかけに見いだすことができるでしょう。そして、その問いへの応答を、「西洋思想の根本的な矛盾と対峙してその解消を図り、おそらくはその試みに挫折した思想家としてホッブズをとらえ、その苦闘を跡づける」ことによって、なされたのでした（①「あとがき」より）。このホッブズの苦闘の描写は、「ホッブズ神学のヘブライ的性格を強調し、カルヴァンとの対比でそれを解明する独自の視角」であり、「世界の学界に対する問題提起」だと評価されています（長尾龍一『法学セミナー』一九九六年三月号）。

また、先生のフッカー研究は、「ワラくず一つ拾うにも神のみ胸を聞けというピューリタンの強迫神経症的信仰を批判し、神から相対的に独立した人間に固有の領域を確保しようとする」人物としてフッカーをとらえます（②二一〇頁）。このフッカーの思想は、「人間の尊厳の神学の確立へと向かう」ものと総括され、次のようなシンパシーあふれるむすびのことはへと集約されます。「その努力の結実としての『教会政治理法論』は神が平和と秩序の神であることを強調し、ピューリタンに対して、『あなたがたも人間だということを考えよ』……と訴える

序文によって開始されるのである。」(②二一―二頁)。先生は、フッカー研究を「まだ道半ば」であると表明されています(②「あとがき」より)が、フッカーの「人間の尊厳の神学」への道行きをたどられるであろう、その研究成果を目にする日を楽しみに待ちたいと思います。

このたび、甲南大学法学会は、高野先生の多年にわたる学内外の功績と学問研究に感謝と敬意を込めて、『甲南法学』の本号を記念号として献呈させていただきます。先生が、今後とも、ご健康で、社会と学問の世界で活躍されますことを、心よりお祈りいたします。

甲南大学法学部長

武井 寛